

# たる

## 樽

2

2013 February  
No.364  
390 yen

ありがとう

藤本義一さん

大森一樹、成瀬國晴、

難波利三、眉村卓、

古川嘉一郎、旭堂南陵、

宮本二美生、中田有子、

保田善生 他

〔親子対談〕

藤本統紀子

×  
フジモト芽子

〔巻頭言〕酒ゴコロ、男ゴコロ

椎名誠

酒の家系図 石原良純

〔巻末言〕吉田類の酒場吟行

立ち飲みがある町 新山ひろし



テレビ番組の司会者やコメンテーターとして  
も広く親しまれた、藤本義一さんが  
昨年10月30日に亡くなられた(享年79歳)。  
多彩な才能と人間的魅力にあふれた氏を追悼し、  
諸分野で深い関わりを紡いできた方々に「藤本義一」という  
人物の才能と魅力、その素顔について綴ってもらった。

「特集」

直木賞作家

# 藤本義一さん

## 追悼企画

イラスト／成瀬國晴



NARUSE

# 「サヨナラだけが人生だ」と言われますが、藤本さん。

文／大森樹（映画監督）

もちろん、私も『11PM』で「藤本義一」の名を初めて知った一人である。それは、中学2年生にとつて、男の世界へ誘ってくれた特別な大人だったといってもいいほどだ。それでも、マスメディアが「藤本義一」といえば、『11PM』の（当時、低俗番組という言葉さえあった）という枕詞で、軟派の代表のように紹介されるのにはいささか抵抗がある。確かに、文筆を生業としているにもかかわらず、活字ではなくテレビという媒体でその名を知られたという意味では、時代の波に乗った軽さが記憶に留められるのかもしれないが、

右する極めて大切なものだった。その番組に、8ミリ映画の審査でゲスト出演したのが、確か藤本さんと直接顔を合わせた最初だった。藤本さんは、たかが高校生の自主映画作品に実に丁寧で的確な感想を語られていた。それが、映画への愛情と造詣の深さだと知らされたのは、後で、映画脚本家として川島雄三監督を師と仰ぎ、宝塚映画を経て大映で勝新太郎の『悪名』シリーズ、田宮二郎の『犬』シリーズの脚本を手懸けられたとお聞きしてだった。映画青年を気取っていた自分の不明を恥じると同時に、まるで「生きている日本映画史」ではないかと感動したことを覚えてる。

70年代、NHK教育テレビでは、『若い広場』という当時の高校生、大学生向けの、今というトーク番組があった。そこでの「藤本義一」は、当時の怒れる若者たち、あるいはシラケ世代の心情と発言に真摯に向かい合う硬派の進行役だった。とりわけ、NHK大阪が取り上げていた若い世代の映像の特集は、高校時代から8ミリフィルムで映画を作っていた私には、自分のアイデンティティを左

以後、お会いする度に、藤本映画史のさわりを聞かせていただいたが、今でも思い出すのは、『悪名』シリーズの脚本で、勝新の八尾の朝吉親分が、弟分のモートルの貞、田宮二郎に、知り合いの親分が胃癌で死んだので葬式に行つて来てくれと頼み、葬式から帰ってきた貞が朝吉に言う台詞、「親分、いがんで死んでありませんでした、棺桶の中で

真っ直ぐでした」——日本全国上映の映画でこんなギャグ、関西でしか通じないと没にされた話。「どう思う、大森君？」といかにも残念そうに言われるので、「面白いですが、いつか僕の映画で使わせてください」と答えたが、その約束は未だ果たされないうままだ。

25歳で私が初めて松竹の商業映画『オレんじロード急行』を監督した時、この映画を大きく取り上げてくれたのは、読売テレビの『11PM』だった。日本映画の若手のホープとしてゲストに招かれた私は、ようやく『11PM』の藤本義一とテレビの中で出会った。中学生で初めてテレビの藤本さんを見てから10年が過ぎていた。

再び、テレビの中で藤本さんと並ぶことになったのは、1995年の1月16日。朝日放送の『お笑いグラフィ』の審査員の席だった。8ミリ映画からお笑いへ、以後数年この番組で、笑いの芸について藤本さんの見識に触れることになるのだが、それよりも鮮烈な記憶として残るのは、この日、審査を終って別れた12



時間後、私たちはそれぞれ芦屋と西宮で大震災に遭遇することになったのである。

阪神大震災後、藤本さんは被災遺児のための「浜風の家」を立ち上げられ、私は被災した自宅

マンションの復興工事に奔走することになったのだが、その

間に、震災時のトラック輸送をテーマにした映画「荷物をお

くる心をおくる」をトラック協会のために、藤本さんが企

画プロデューサー、私が監督して作った。それは、私

の「生きている日本映画史」との唯一の映画作品となっ

た。芦屋の奥池の藤本別荘の新年会に、家族そろって

行かせていただくようになったのも、震災以降だ。

その頃まだ幼かった子供たちは、そこで繰り広げ

られた独創的で珍奇なゲーム大会の数々を今

でも覚えていて。また、震災から10年以上経っ

ても、地方の防災のシ

ンポジウムなどで顔を合わせることも幾度かあった。今思えば、あの日を境に、私的から公的へ、藤本さんとの関係はさらに変わっていったようだ。

同じ阪神間で被災した体験もさることながら、それまでの出会いがいつも在阪テレビ局であったことは、

私たちがずっと同じ関西にいたからに他ならない。関西出身の映画監督

のほとんどが活動の場を東京に移して、その仕事ぶりを目にしてい

ると、関西在住であることのハンディを感じないこともないが、それ

でも、東京に住む気にはなれない。それが何故なのかというと、実は正

直なところ、はつきりとした答えはない。藤本さんに聞けば、どう答

えられたらろう。「場所やないよ、時代やろ」と言われたような気がする。

深夜番組から教育テレビ、8ミリ映画、「お笑いグランプリ」、そして

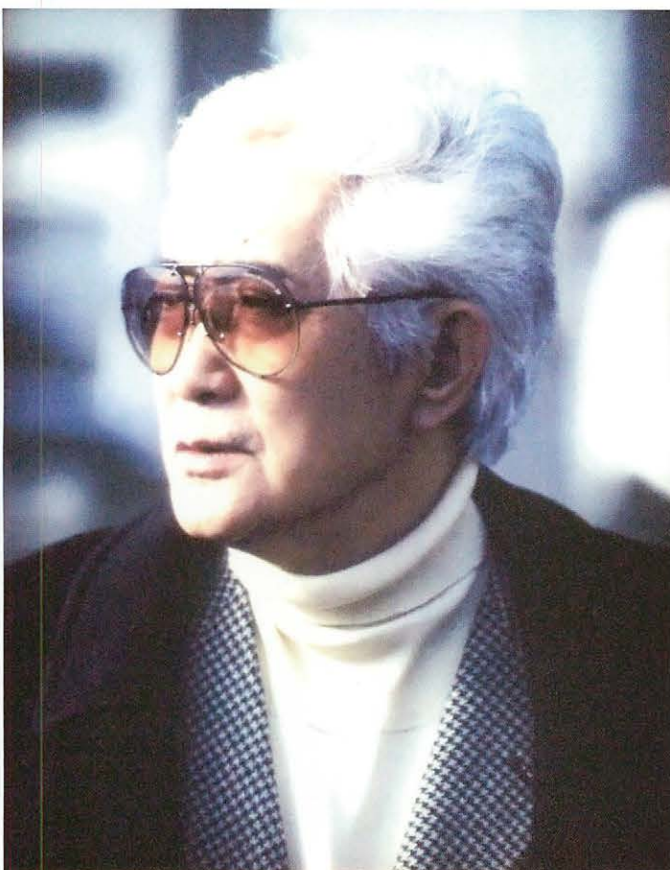
大震災と半世紀近く。私にとって「藤本義一」という名には、いつも「その

時代」があった。だからこそ、「次の時代」でもうその名に出会えない哀

しみは、とてもとても深い。

# 藤本義一

(ふじもとよしかず)



本名の読みは、ふじもとよしかず。1933年、大阪府堺市生まれ。大阪府立大学経済学部卒。在学中より映画シナリオ、ラジオ・舞台劇の脚本を手がけ、昭和32年『つばくろの歌』で芸術祭参加の戯曲部門で文部大臣賞を受賞。大映から宝塚映画に入社、映画『駅前シリーズ』などのヒット作を数多く執筆。1965～1990年、テレビ番組『11PM』の司会を務める。

1974年『鬼の詩』で第71回直木賞受賞。1995年小社刊『掌の酒』は日本図書館協会選定図書。他、代表作に『螢の宿』『迷子の天使たち』『人生の賞味期限』などがある。日本放送作家協会関西支部長、プロ作家育成の心齋橋大学総長を務める。2012年10月30日死去、享年79歳



『鬼の詩』(講談社刊)

1974年作、第71回直木賞受賞作品。明治末期の大阪の寄席で活躍した桂馬喬を主人公に、上方芸人の芸に対する執念と壮絶な生涯を描く。75年には映画化、桂福田治さんが主人公を熱演した

撮影：関幸貴

トレードマークのロマンスグレー、サングラスの奥の穏やかな眼差しが藤本さんを象徴する1枚。葬儀の遺影にも使用された

## 『鬼の詩』直木賞受賞の1日



上：受賞の喜びをかみしめ、囲み取材  
下：親しい仲間と賑やかに受賞を祝う



報道記者に取り囲まれ、選考結果を伝える電話を受ける。  
手前には期待と不安の入り交じった表情のお母上



撮影：飯塚康行

1974年6月2日、銀座4丁目交差点にて。  
直木賞を受賞される1か月前、東京での私の初個展会場前(コアビル)。  
これが2人の人生の分岐点となる記念の写真だ

# 残されたウイスキー

文／成瀬國晴（イラストレーター・漫画家）

藤本義一さんの葬儀の祭壇には、愛煙の『ピース』と大好きだったウイスキー『シーバスリーガル(18年)』が並べてあった。

通夜のとほもそうだったし、その

前夜、ヒゲを伸ばしたご遺体の枕許にあったのでずーっと気になっていった。琥珀色したウイスキーが底に少量残っていたからだ。

私の頭に今も残っているその約

2センチは、故人が前日まで楽しんでいたもので、入院によって突然に断られた残念の量にも思えるが、むしろ快癒して帰った時、欲喜の一献として残したと思える微量な量だった。

空けると人生にケジメをつけるようで、残ると復帰の喜びにつながる…。藤本さんらしい、実にビミョーなも

のだと思っている。

逝去後四十九日を迎える12月中

旬、私は同じウイスキーを求めて、

大阪のデパートを何店も歩いた。

クリスマスシーズンで混雑する酒

売場は、ワインがのさばっていてウ

イスキーは隅の方で申し訳なさそう

に小さくなっている。商品アイテム

もそんなになく、思うウイスキーは

見当たらない。

阪神百貨店も片隅だったが、思う

18年ものをやっと見つけて贈った

が、どうも祭壇のものとラベルの色

が違うように思っているけれど、ま

あいや。

あの2センチのものを飲んだ後、

続けて口に含み「ナーさんの18年も

んの方がうまいがな、やっぱり野球

もウイスキーも阪神やな」と喜んで

くれると思うからだ。

「酒を飲む、友と飲む、のむで飲

む」。かつて、『HPM』のバーテンダー

野村頼紹さん(故人)の店(のむ)のた

めの色紙にこう書いた藤本義一さん。

今ごろはどこで誰と飲んでいるの

だろう。六代目 松鶴師匠とだろうか、

井上ひさしさんとだろうか。(合掌)

# 羨望の先輩、 希有な作家

文 難波利三（作家）



たてまえの会にて（ホテルニューオータニ大阪・2012年1月27日）

初めて出会ったのは昭和54（1979）年7月25日の天神祭の日、場所は大阪の上本町2丁目角にある「とんぼ」という料亭だった。光文社の懇意な編集者が出版されたばかりの著書『少年と拳銃』を届けに行くのに同行したのである。藤本さんは直木賞を受賞して5年目で、執筆にテレビにと殺人的なスケジュールに追い立てられている時期であり、僕は直木賞に5回外れた頃だった。

約束もなく厚かましく押しかけたのに嫌な顔もされず、欲談しながら一緒にハモ料理を食べた。かなり緊張していたはずだが、これまた厚かましく本を所望すると、編集者が届けた数冊の束から一冊を抜き取り、気軽にサインして頂いた。帰りに料亭の玄関先へ出たとき、前方の夜空に天神祭の花火が淡く弾けて見えた。だから日時の記憶が鮮明である。

道から道に歩み来て

道から道に別れて歩む利三兄に

義一

作家の道は同じだが、お互い個性

の違う道を歩むのだという意味だろうが、そのとき僕はこの羨望の先輩に作家として認められたようで感激した。本は今も大切に保存している。

以来、「たてまえの会」にも参加して親交を深め、20年ほど前、遂には藤本さんご夫妻に仲人までして頂いた。われわれ夫婦が結婚式を挙げていないのを知った藤本さんと、たてまえの会のメンバーらが友人知人らに呼び掛け、ホテルニューオータニで実現したのである。花嫁衣裳の愚妻の感涙を見たとき、ご夫妻への恩は終生忘れてはいけないと誓った。

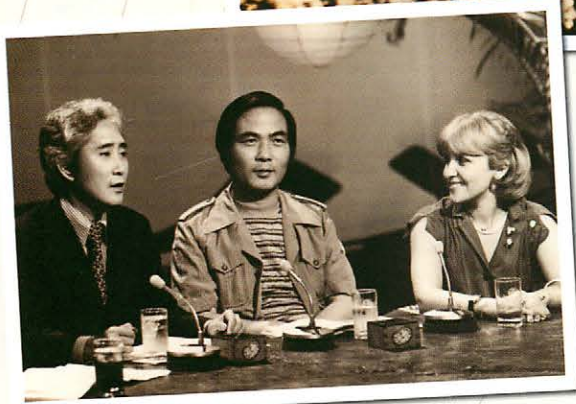
人間的には豪胆で繊細で、饒舌で寡黙で、何をしても絵になる格好の良さが滲む、希有な作家だった。大阪が生んだ井原西鶴と織田作之助の流れを汲みつつ、その筆法は硬軟を自在に操った。文章には大阪人特有の柔和な温もりと、背反する鋭敏な感性のきらめきが、絶妙なバランスで融合しているように僕には思える。遺された作品の数々はこれからも末永く愛され、生き続けていくだろう。

# 藤本さんとのこと

文 / 眉村卓 (作家)



『11PM』放映中。1976年10月5日(右から2人目が筆者)



藤本義一さんが亡くなってしまった。同じ物書きといっても、藤本さんと私とは、異なる方向のものを書いていたが、逆にそのために、いろいろ学ぶことが多かったと言える。藤本さんの幅の広い人脈や、アバウトなところと鋭い神経の不思議な調和、さらに私にはとても不可能と思えた生き方などが、とかく自分自身を物書きの枠の中に閉じこめがちな私を、考えさせ、励起してくれたのであった。

いやこんな調子では、本当のことを述べているにしまいそうだが。文章になってしまいうさだ。

げたりして準備し、店が始まる深夜半前の終業まで働くのである。そこへいつも水を運んでくる学生がいた。ひよろりとした、力仕事はきつそうな男だったが、後年、藤本さんとアルバイトの話をしていると、それは俺だった、ということだったのだ。

学生時代、私は道頓堀橋の横のアルサロ(アルバイトサロン)で、キャパレーミたいなところで、バーテンダー見習いをしていた。といっても二階の小さなコーナーを受け持っていてビールやおつまみを出す雑役だけでも。午後店に入って、当時は木箱だったビールを二階の水槽に運び上

力仕事は似合わないと思ったのは、しかし私の間違いで、藤本さんは日本拳法をやっていたのである。三十代から付き合うようになって、私は少しばかり柔道をかじっていたから、藤本さんの仲間と一緒に飲んで乗ってくると、ときどき格闘の真似事をした。もちろん遊びだけれども、メンバーの中には本気だと思った人もいて、加わってきたりしたのである。投げたり逆を取られて投げられたりで、元気だった。私はその後飲み過ぎで、医者からストップをかけられたが、藤本さんは以前にも増して酒に強くなってゆく感じであった。

あれもこれも、速くなり、消えてゆく。



# プロ作家の養成をとし 「心齋橋大学」を創設

文 古川嘉一郎（日本放送作家協会関西支部事務局長）



古川さん(右)の著書『虹色の龍』(たる出版刊)出版記念会。心齋橋大学開校3年目頃のこと

藤本義一さんの功績は数多くあるのだが、その中で特筆すべきは、日本放送作家協会関西支部のメンバーによるプロ作家養成スクール「心齋橋大学」の創設である。

昭和62年の春に開校。支部長であった藤本さんを総長とし、新野新、梅林貴久生、山路洋平、林禰男、古川嘉一郎、正田哲夫などが講師として参加。その後、難波利三、成瀬國晴、眉村卓、丹波元、林千代、田中啓文なども加わり、現在は24名の講師陣が指導に当たっている。

創設前、メンバーの一人が「長年にわたって蓄積してきたノウハウを、そんなに簡単に教えるのはライバルを増やすことになるのでは」と懸念の声もあがったが、「そんな狭い気持ちは捨てよう。この関西から新しい可能性を発掘し、併せて人生を広め深めていく文化の場づくりを是非みんなで行おう」と、藤本義一さんがその声を一蹴した。

すでに「大阪文学学校」や「大阪シナリオ学校」という作家養成機関はあったが、そんな藤本さんの熱い思

いが開校に向かわせた。

現在26期生が学んでいるが、これまで約2200名の卒業生を出し、その中から40名ほどの精鋭が新しいプロの書き手として巣立った。文学賞の受賞者も数多く誕生した。

筆者はもう50年近く藤本さんを師と仰いで様々な活動を共にしてきたが、印象に残っている言葉がある。

プライベートで一緒に飲んでい

る時に、「けど、何やなあ……。俺らはようこんな稼業でここまでやってこれたよなあ」と藤本さんがつぶやくように言った。

そうなのか、直木賞作家の、全国区の、あの藤本義一でもそんな思いで生きてきたのかと、プロ作家としての本音に触れたような気がした。

時に優しく、時に厳しく生徒たちと真剣に向き合った藤本さんの遺志をしっかりと引き継いでいかねばならない。通夜と葬儀に参列した多くの受講生の顔を見ながら、そう思った。

文／四代目旭堂南陵（講談師）

# にぎやか好きの先生の裏に

桂三枝改め文枝師匠に贈った義一

先生の色紙は「男は振り向くな、すべては今」であった。私のは色紙に「朽ちた橋を振り向かず渡れ」であった。義一先生の生き方を示す言葉であり、自分より若い人に生き方を示唆する言葉であると思っている。

つまるところ全力で生きろ、全力で生きたなら後悔なんかは無いということだと私は思っている。朽ちた橋とは過去の意であろう。

ある時、バーのママに頼まれて色紙を書いているのを横で見たら「いい女は、朽ちた橋を振り向かずに渡る」とあった。私は先生に「わたしが貰った色紙とよう似た文句ですなあ」と言う。「そないにええ文句が、仰山あるかいな。けど男も女も自分の生きてきた事を後悔したらあかんねん。あの時、ああしたらよかった、こうしたらよかったというけど、その時は必死で判断してる

ことが多い。それを悔いたらあかんねん」

この言葉に、そのママは涙を浮かべていた。きつと水商売で成功するまでの事を思い出したのだろう。そこまで察してのこの色紙の言葉に、義一先生の優しさを感じた私であった。

文枝師匠の色紙も襲名で悩んでいたことを察しての優しさがある。もし悩んでいる女性がいたら「女は振り向くな、すべては今」と書いたかも。『IPM』にも大阪府立大の後輩ということで、たくさん出演させてもらった。パーティだ、宴会だという、必ず呼んでくださった。

トップランナーは孤独をひきずりながら、次の者に励ましを与える。統紀子夫人をはじめ、にぎやか好きを集めた裏には、寂しがり屋だったのではないかと、私はひそかに思っている。

義一ファミリー、秋の旅。岡山・湯原温泉にて。藤本さんの右隣が筆者



# 「やさしい」の原点

文／宮本二美生（元毎日新聞記者・大阪国際大学教授）

少年藤本義一は1939（昭和14）年、泉北郡浜寺尋常小学校（現堺市立浜寺小学校）に入学した。6年生になった時「国民学校令」により、尋常小学校は国民学校になり、その秋から、東京、大阪の3年生以上の小学生を対象に学童疎開が始まった。大空襲からの避難というのがその理由だったが、突然親元から引き離される子どもも大変、引き受ける村も大変、ということ、学童疎開は多くの災難や悲劇を生むことになる。

なあ。『あいつら人間やない』、そう思うたね。ひもじかった。しかし、それよりも一番こたえたのは、一緒に疎開したヤツらの裏切りやった。村の大人、その子ども、それに先生、強い者には見さかしく媚びへつろうて、オレたちのあることないこと、や、ないな、とにかく相手が入り入りそんな悪口なら『つくって』でも言うて、取り入ろうとするわけやねえ。さもししい、あさましい、いじましいい、いやらしい。『そこまでするか』というくらいひどいもんやった。人間の一番汚いところ、醜いところを見てしもうた。子ども心にも『地獄を見た』と思つたね。

藤本さんは相手の立場に立って考えることができる人、そして見えないところで気遣いができる人、義理人情に厚い人、だから頼まれると「イヤ」とは言えない人である。私もずいぶん無理を聞いてもらった。「オレはオレ」という信条を曲げることはなかったが、要するに「やさしい」のである。とりわけ「弱い」人にやさしかった。弱い人にやさしくしようとするれば、「強い」人の反感を買うこともある。その時は、よけい弱い側に肩入れする、そんな人だった。そう言えば、藤本さんが好んでよく使う言葉があった。「高価ではないが高貴である」。藤本さんは弱い者に「高貴」を見ていたのかも知れない。

1971（昭和46）年の大阪府知事選で藤本さんは黒田了一さんを応援した。相手は佐藤義詮さん。70年万博を大成功させた現職、盤石だと思われていた。私は黒田陣営担当の一人だった。選挙キャップは「予定稿、適当につくつていよ」と言つたきり、なにも言つてこない。しかし、世間の雰囲気はそうではない。しかし、遊軍キャップに「ひよつとしたら、ひよつとするかも知れない」と言つと「えらいこつちや。『当選原稿』思いつきり作つていよ」というので、藤本さんに電話を入れた。「たしかに『ええかげんにやめんか』という電話はようかかってきます。このあいだも『お前はアカカ』言うので言うたつたんですわ。『クロだ』ハハハ。それだけ、むこうも危機感持つとるんと違うかなあ」。4月23日、黒田さんは、知事となり、2期務めた。

経済危機の時は自信を持って、こう言い放つた。「財界はあかんけど、大阪のザイ界は元気ありまっせ」。漫才界である。「漫才大賞」をはじめ、藤本さんがいつも目をかけていたの

続くことになる。

「あいつらは今でも許せない。これからもオレが生きている限り変わりません」。スナックのカウンターだったと思う。「それでも、そういうヤツばかりだったわけではないでしょう」と口をはさむと「そのとおり、その時の友だちは一生の友だちです」と言つた。



Jim&Elizabeth George作、Judy Luenebrink絵「God's Wisdom for Little Boys」(Harvest House Publishers)

は、売れっ子ではなく、まだ売れない若手だった。

戦争が開けたパンドラの箱から出た不幸と邪悪は藤本さんにも襲いかかった。しかし、藤本さんをへこますことはできなかった。そして「友達」を通して、箱の底に残っていた「希望」を見た。それは「真実」は「理不尽」を超える、そんな確信のようなものではなかったか。藤本さんは「パンドラの箱の底」に「やさしさの原点」を見たのである。

しかし、私と藤本さんの話は、これで終わるのではない。

藤本さんが亡くなられる少し前、私は、あるところから「文学としての旧約聖書」の話をしてもらえないか、と頼まれた。「わかりました」と返事をしたが、なにか最近の話が欲しい。こう思っ、たまたま英文の絵本、Jim&Elizabeth George 作、Judy Luenebrink 絵「God's Wisdom for Little Boys」(Harvest House Publishers)をめぐっていると「ハッ」とする絵が目にとまった。二人の野球少年が、虹を見上げながら、雨の上がるのを待つ

ている絵である。左側の少年の背番号は「1」、右側の少年の背番号は「7」、そして犬の背番号は「17」。これが、何を意味しているのか、それは後に回すとして…。

藤本さんの葬儀・告別式で、葬儀委員長のイラストレーター、成瀬國晴さんは、挨拶の中で、こんなエピソードを紹介した。「藤本義一さんが『鬼の詩』で直木賞を受賞したのは1947年、昭和49年7月17日。以来、義一さんは『オレのラッキーマンバーヤ』と言って1-17の馬券を買いまくりました。私は思わず「おつ。1-17、一緒や」と心の中で叫んでいた。

さきの野球少年の1-17と犬の17、これは旧約聖書の17番目に出てくる「箴言」の17章17節を指している。この見開きページのテーマは「友情」、左のページに作者の言葉と箴言が、右のページに野球少年の絵がのっている。箴言17章17節——「どのようなときにも、友を愛すれば苦難のときの兄弟が生まれる」。藤本さんの生涯を貫いた言葉として、藤本さんに献げたい。

対談

# 夫を語る、父を語る

藤本統紀子さん（シャンソン歌手・エッセイスト）×フジモト芽子さん（アーティスト）



直木賞作家として活躍する一方、マルチタレントとしてブラウン管を沸かせた藤本義さん。シニカルで軽妙な語り口、ダンディなたずまいに秘められた、知られざる素顔とは…。

夫、父親…家庭人としての素顔に迫るとともに、氏の原動力を探るべく、ご夫人の統紀子さんと次女の芽子さんに想い出を語っていただいた。

## 夫として、父として

統紀子さん 藤本の座右の銘、「蟻

一匹炎天下」（『蟻一〇〇義一〇、ご

本人の名前に掛けた人生訓）のイメージで、烈火の炎のような印象を持たれることが多かったようですが、家では決して炎じゃなかったね。

芽子さん 実際は、風とか竹とか、さわさわしたイメージ（笑）。

統紀子さん 我々に対しても、とてもシャイな人でした。一家の長なのに、私にも娘たちにも、あーしろ、こーしろ、というのがなかったです。女性ばかりに囲まれてか、飼

い

犬（雄）に「オマエだけや」って話しかけて。帰宅したら、まず最初に犬に挨拶（笑）。

芽子さん 外で飲んでいても、食べ物ほとんど口にせずにご飯を

するのですが、母がシャンソンの仕事で遅くなったりすると、私に「ア

イツどこ行ってるの？」なんぼ稼いでんねん！」ってオレ言うたるわ」って勢い込んで。でも、いざ母が帰宅すると「おう、今日はどうやった？」

しか言えない（笑）。こっそり母にキックする振りをして、小声で「やったったでー」ってニヤリ。傍

から見ていて両親は、夫婦から姉と弟、母と息子のような関係に逆転し

てた（笑）。

統紀子さん そう。褒められるように、怒られないように、まるで子供

のよう（笑）。

芽子さん 自宅で療養中、「オレな、坂の下までと自分で決めて歩いてきた！」って、母に嬉しそうに報告するんだけど、「何時頃？」「夕方7時

過ぎ」「暗いから危ないやん！」って、いつも余計怒られてる（笑）。

統紀子さん 長女も私と同じタイプ。療養中にこっそり飲んでいたら好きな『シーバスリーガル18年』を

長女が見つけて、「あかんー」って台所に流したら、「オレ、排水口にな

りたい…」ってしょんぼり。

芽子さん 私のことはなぜか、いつまでも子供扱い。元気な時、酔って帰ってくると「芽子、オマエに小遣いやる」って3000円を手に握らせてきたり。もう私、40代なのに（笑）。いつも、お札はクリップに挟んで、小銭はポケットにじゃらじゃらさせていたのですが、掴んだのが500円玉だったりすると、しくった！」って顔していましたね（笑）。

家に母がいなくて私と二人だけだと、そわそわして不安みたいで…。

統紀子さん 家庭人という言葉が世間に浸透し出したのが、ちょうど藤本の世代くらいからなのかもしれ

ません。



藤本統紀子さん

文筆家としての素顔

統紀子さん 昔から、さあいいよ締め切り、という時になるとなぜか眠り出して(笑)

芽子さん 不思議に思ってた。なんで？ って(笑)。

統紀子さん そう、後からわかったんです。脳梗塞で入院していた時に横たわりながらずっと上を向いているから「何をしてるの？」と聞くと「原稿書いてた」って言うんです。

ああ、頭の中で書いてたんだって。ペンを持ち始めた時には、8割がた出来上がっていたんでしょうね。周囲の人が驚くくらい、原稿を書くのが早かった。ある時は、ウイスキーを傾けながら、白紙の原稿用紙の前に「1分でしゃべる」って宣言して、書く前に正確に1分でセリフを読み上げていました。テレビ業界にいたからか、数字への意識が高かった。

芽子さん 小説やエッセイは、構想の段階で必ず「オマエ、こんな話聞いたことあるか？」って訊ねられました。

統紀子さん うん、「今までに存在しない小説が読んでみたいねん。そ

れをオレが最初に書きたい」って。

そのパロメーターが芽子になってた。

芽子さん 68歳の時のエッセイ『人生の賞味期限』(岩波書店)は、可愛がっていた姉の息子とのやり取りがきっかけの作品です。賞味期限が切れたジュースを捨てようとする

「賞味期限って何？」ってただだをこね始めて。父が説明して、「人生にもあんねん、賞味期限。オマエはまだ長い」。すると、「じっちゃんは何腐ってるの？」って(笑)。実体験に基づいた作品がほとんどで、フィクションも実体験を脚色する感じですよ。

——『人生の賞味期限』より一部引用

「私は、ずっと自由業である。が、人間はすべて自由業の意識があつていいのではないかと思う。一番嫌いな言葉は、仕事である。事に仕えるのが人間の真の生き方ではないと思ってる。

それよりも「仕」がいいのではありませんか。己に忠実に仕える気持ちが第一ではないのか。

人生は蒸溜酒ではないのである。人生に醸造酒の味わいがあつて

人生なのだ。

古酒の賞味期限は永遠なのだと思

いながら、自己陶醉するのも悪くないものだ。——

永遠のダンディズム

芽子さん 亡くなる少し前、「オレ、死んだらまだ生きとったんか？ って言われるんちゃうか？ っつつぶやいたことがあつて。

統紀子さん うん。「オレ、ウツかな。ひどいウツに取り憑かれたもんなや。オレはどうなんの？」って。

最期の夏のある日、急に「オレ、ヒゲ生やすねん」と言い出したんです。

「えっ、ヒゲ?!」というのも「オレ、ナマズヒゲやから、ヒゲは無理や」と

ずっと言っていたのに……。「オレ、いくつに見える？ すっかり80のじいさ

んか？」と気にしていたので、イメーヂチェンジだったのかもしれない。

芽子さん 病院から帰ってきた時、ヒゲをたくわえた、棺の中の父の声

が頭に鮮明に響きました。「オレ、いくつに見える？」って。「50代くらいに見えるよ」って答えたら、にっこりした気がするんです。みんなに見て見て！ っつて言いたくなるような表情で。

統紀子さん 葬儀の遺影は、藤本の生前に二人で選んだ写真です。「オレ、これ！」「私もこれがいいと思っ

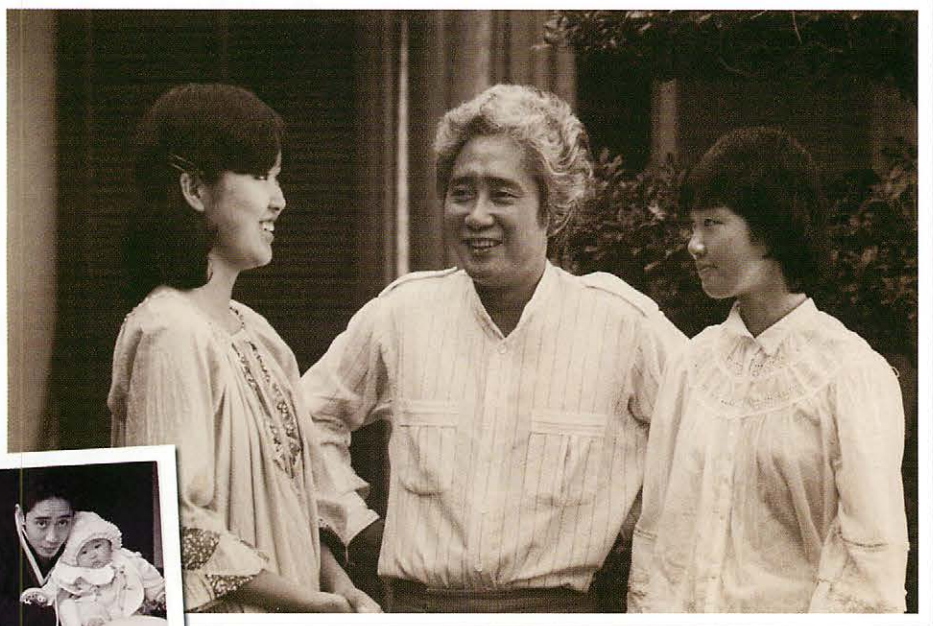
た！」って。最期まで、藤本義一らしい生き方を貫いたと思つています。



フジモト芽子さん

# 父のこころ

文／中田有子（藤本義さんの長女）



自宅の庭にて。有子(写真左・高3)、芽子(中3)



父の膝の上で

「じじちゃんかっこいいねえ。でも、俺の知ってるじじちゃんと全然違う…」。

父の追悼番組を見た次男の感想である。対談で母や妹も言っているように、うちでの父はいつもどこかおどけたところがある人だった。そのせいか、中身のある話を随分したはずなのに、思い出すのは日常の何でもない会話ばかりだ。オレがせっかくだいっばいええ話したったのに…と大げさに嘆く父の顔が思い浮かぶ。

車の免許を取ったばかりの時、よく隣に座ってくれた。運転したくてたまらない私と運転知識がない上にお酒が入って上機嫌な父の夜中のプチドライブは、今思い返しても無謀だったと思うが、狭い道に突入して泣きそうになった時、横で、えらいことになったなあ、どないしたらええんかなあと脳天気につぶやかれると、かえって、何とかがんばろうという気持ちになれたのが不思議だった。

界に住んでいたころは、よく、自転車の後ろにのせて家の周りを

走ってくれた。近くの商店街の床屋についていき、帰りに付録付きの雑誌を買ってもらうのが楽しみだった。スイートポテトはこのんが一番うまい、と同級生の店をひいきにしていた。

大学受験の時、でかける準備をしていると父が阿波踊りのように手をヒラヒラさせてがんばれよ〜と言いながら部屋に来た。普段夜通し原稿を書いて昼前まで寝ているのに、何か言ったらなあかんと思ってくれたのだと思う。

照れ隠しの言葉やしぐさで、いつも充分に気持ち伝わってきた。二人の息子のことも、将来何になるんやろう、どこの高校に行くんやと最後まで気にしてくれた。

父が亡くなった次の日、葬祭場で係の人から書類を一通手渡された。記入するのにかなり抵抗はあったが、恩返しに気持ちを込めてできる限り丁寧に書いた。

私の出生届を書いてくれている五十数年前の父の姿が、そのとき一瞬見えたような気がした。

# 藤本義一さん追悼企画

ミロワヰ  
(三合)  
つぶれると  
思いつた  
で

一生でも  
(二升)  
平気です  
後生大事に  
(五升) 研みます



本誌主筆  
高山恵太郎  
向=成瀬國晴

## 生涯、ダンディズムを 貫いた人―藤本義一先生

文/高山恵太郎(本誌・編集長)

と言うと、先生はオンザロックス一杯をおいしそうに飲み干し、白紙の原稿用紙をやや斜めにして、筆をすらすらと走らせた。待つこと約15分

目の前で、約束の原稿が見事に出来上がった。「出来たよ! 間に合つてよかつたな」と満面の笑顔。拝見する

と、あの白紙の原稿用紙に一字一句、訂正なしでジャスト800字が埋め尽くされていた。その原稿を手にして一目散に写植屋に駆け込んだ。

今から約30数年前の話である。当時、テレビで人気の藤本義一先生に『ぶらうん管交友録』というテーマで小誌『たる』に連載をお願いし、カットのイラストは先生お気に入りの成瀬國晴画伯だった。この連載は好評で

数年以上続いた。白紙の原稿にすらすらと筆を走らせ、見事訂正なく原稿を仕上げた藤本義一先生にプロ意識を強く感じた。既に頭の中に依頼した

原稿内容が寸分なく入っていることを眼前で見せて頂いたことに先生のダンディズムを見た気がする。

小誌月刊『たる』は今年、創刊34年目になるが、過去に1000号記念、20周年、30周年と記念パーティーを3回だけ行っている。藤本義一先生にはそのすべての会の代表発起人をお願いした。中でも20周年(1999年)の200号記念号に「おお! 二百号」と題し、特別寄稿をして頂

いた。その一部を抜粋したい。『たる』が二十周年を迎えた。「そうか、あれから二十年が経つたのか」と呟いた。

大学の後輩である講談師の旭堂小南陵現四代目南陵君がやって来て、「先輩、今度、こんな雑誌が大版で出版されますねん。そこで創刊号

に二人の対談を掲せようということになりましたん。」

「何の本やねん」

「酒の本、アルコールでんな」

「はあ、それやったら三号(三合)でつぶれるなあ」

「そう思いまんな」

こんな会話からはじまった。その樽が二十年を転がりつづけた。これは奇蹟というしかない。やはり樽を転がす高山氏の転がしの技術が巧みだったのだとしかいいようがない。

藤本義一先生には常に心にかけて頂き、大変お世話になった。何もご恩返しができなかったが、お亡くなりになる前、愛娘さんのフジモト芽子さんの単行本『旅するコトソン人形』(小社刊)が上梓出来たことを大変喜んで下さったと伺った。ロマンズグレー

の藤本義一先生はとにかくカッコよくダンディだった。非常にシャイな人で、一生ダンディズムを通し続けた人で、風貌だけでなく、心の中までダンディな人であつたと思つた。

たのか」と呟いた。大学の後輩である講談師の旭堂小南陵現四代目南陵君がやって来て、「先輩、今度、こんな雑誌が大版で出版されますねん。そこで創刊号

「たてまえの会」(2012年1月)にて。右より、大村崑さん、藤本義一さん、統紀子夫人、筆者





# 追悼「ありがとう、義一さん」

諸分野で深い関わりを紡いできた方々に、  
藤本義一さんに贈ることばを綴っていた。

ご寄稿いただいた方々（順不同）  
六代目桂文枝さん（落語家）、新野新さん（放送作家、コシノヒロさん（ファッションデザイナー）、  
もず唱平さん（作詞家）、四代目桂福團治さん（落語家）、古賀裕史さん（心斎橋大学）、林鶴男さん  
（心斎橋大学）、浦田康子さん（落語みゆーじあむプロジェクト）、幾世淳紀さん（文珠社代表取締役）

義一先生の

お言葉で

文枝に

はれました。

樹の枝

# 「義一さん」

やさしい人であった

まゆみ人であった

なにもない、わかってしまう人だった

おれが

家（た）族（ぞ）びで親しく

名（な）コトト（は）ま（は）の（は）の（は）の  
おれが（は）ま（は）の（は）の（は）の

コシノヒロ



下（か）詞（し）か（は）と（は）文（ぶん）世（せ）界（かい）の（は）人（ひと）と（は）看（かん）做（し）し（は）ま（は）を  
か（は）の（は）世（せ）界（かい）だ（は）助（たす）け（は）の（は）世（せ）界（かい）だ（は）

おれが（は）藤（ふじ）本（もと）義（ぎ）一（いち）先（せん）生（せい）合（がっ）会（かい）も（も）ず（ず）唱（な）平（へい）

全国社会人落語日本一

決定戦、いつまでも

石巻顧問として

落語文化発展のため

見守ってくださり。

溜落語みかじあむ

プロデューサー 浦田康子

深夜に、君、今なに読んでる？

という声が聞かれなくなりました。

時々、こつちから電話して

いいですか。 林 祇男

先生と食事をした際

「これからは肩書を捨て、

全身の叫ぶ家で勝負しろ」

私の心に残る言葉です。

落語家 桂福田 治

いつも優しく、人生の機微やユーモアの大切さ、松露亭の

命名まで、感謝一杯です。ありがとうございました

天の橋立・文珠荘 幾世淳紀

毎週金土曜日の晩に届く競馬のファックスが途切れた時  
とて寂しい思いました。先生は人生の道標でした。

古賀 裕史

●東京 [浪速おでん ぎょく]  
義一さんお墨付き  
「ほんまの旨いモン」を

入り口には義一さんが書いた“酒を飲む 天下を呑め ぎょく”の暖簾が下がる。25年前、藤本家の“自宅のおでん”をコンセプトに始め、鍋を開くように楕円形のカウンターにご夫婦が肩を並べていたという。  
「ぎょくとは江戸時代に江戸っ子が上方人を嘲る表現だったそうで、それをあえて店名にするところが、先生の洒落で粋なところでね。私が厄年に気にしていたら“関係ないよ、僕は厄年に賞を貰ったくらいだから”と言ったダンディな先生のソフトな話し方が、今でも耳に残っています。統紀子さんが“そろそろ暖簾を書いて貰おうね”と仰っていただけに、心残りです。何かあればいつでも電話をすればいいと思っています…。心の支えをなくし、胸に穴が空いたようです」と店主の尾花伸弘さん。義一さんの「おまえら(関東人)の知らん、ほんまの旨いモン食わしたる」という気概が、この店名から聞こえてくる気がする。

東京都港区六本木7・14・8 アーツ・ショップビル B1F  
TEL.03・3403・3044 (空き状況・予約など要確認)  
営業時間 / 18:00 ~ 翌1:00  
定休日 / 日(ご予約・貸切り要相談)



食べやすいようにカットして、熱々を食べられるように、土鍋に盛りつけてくれる。写真は2人前(1人前1000~1500円程度)、お酒は約50種類。日本酒の美味しさを伝えたいと温度や酒器にも気を配る。650円~1500円まで

## 義一さんが愛したお店

●大阪 [バー [路]]  
法善寺横丁を救った  
署名運動

「おびくになる3か月ほど前に、統紀子さんと御一緒に店に来ていただきました。一杯だけウイスキーを飲まれて帰られたのですが、その時は本当にお元気で、すっかり良くなられたんだと、喜んでいたので、結局それが最後になってしまいました。先生とは、本当に長い間お世話になったんですけど、特にありがたかったのは、法善寺横丁の火災の後でした。大阪市から、消防車が入ってこられるように道幅を倍に広げるようお達しが来て、そんなことしたら、店はでけへんようになるし、街の風情も失われる、どうしようかと、先生に御相談にうかがったんです。まずは世間を味方につけようと、真夏の暑い時期に、先生が先頭にたって署名運動をしてくれました。たった1か月で30万人の署名が集まって、お陰さまで横丁はもとの姿をほぼ留めることができました。先生には、いくら感謝してもしきれないほどの御恩を感じているんです」(店主の井畑貴彦さん談)。

大阪市中央区道頓堀1・7・10 大阪屋バイストリート  
横丁ビル 1F  
TEL.06・6211・0928  
営業時間 / 17:00 ~ 23:30 (LO)  
定休日 / 日・祝

1井畑 貴彦さん 2店の片隅には、缶ビールや「H1PM」の台本など、藤本義一さんを偲ぶ様々なグッズが飾られていた 3平成14年の法善寺横丁火事で、奇跡的に焼け残った、藤本義一さんのポर्टレート



桂福団治さん「藤本義一氏追悼公演」決定！

# 「鬼の詩」が聴こえる

藤本義一さんの直木賞受賞作『鬼の詩』の映画作品(1975年)に主演し、手話落語の屋号「宇宙亭」を命

に晩年まで約45年の親交があったという。

名してもらうなど、親交のあった落語家の桂福団治さんが、藤本さんを偲んで追悼公演を行う。

タイトルは前述の直木賞受賞作にちなんで『鬼の詩』が聴こえる。上方芸人の妻まじい生き様と芸に対する恐ろしいまでの執念を描いた『鬼の詩』をまさに鬼気迫る演技で圧

桂福団治さんは、藤本さんが司会を務めたテレビ番組『IIPM』でも準レギュラーとして出演(当時は桂小春)。落語の演目のネタ制作にも

人魂が再びよみがえる。倒した福団治さん。全身全霊の芸



桂福団治 藤本義一氏追悼公演  
「鬼の詩」が聴こえる  
日時／3月1日(金) 18:30開演  
場所／天満天神繁昌亭  
入場料／3500円  
お問い合わせ／  
TEL.06・6622・7848  
(関西演芸協会)

# 先生からいたただいた言葉 「創造は想像から歩む」

ギャラリー美游館代表取締役佐々木秀幸さん

大阪郊外の住宅地にある「ギャラリー美游館」。決して交通至便とはいえないこのギャラリーでは、折りに触れ、藤本義一さんの展覧会やトークショーが行われた。

なり緊張していたのですが、実際にお会いしてお話させていただくと、本当に気さくな方で、当時の美術界の動向などを、逆に色々と質問にられました」と、佐々木秀幸さんは思い出を語る。

「もともとは、私が娘さんのメイ子ちゃん(フジモト芽子さん)と知り合いで、そのご縁で、ギャラリー開廊15周年の記念として、藤本義一先生とメイ子ちゃんの親子展、『風舞展』を開催させていただきました。初めて、ご自宅にご挨拶にうかがった時は、私もか

の一人一人に心のこもった文字をしたため続けたという。藤本義一さんが「ギャラリー美游館」に贈った言葉は「創造は想像から歩む」。佐々木さんの座右の銘である。



写真上／「風舞展」で展示された藤本義一さんの書(本文参照)  
写真下／佐々木秀幸さん

ギャラリー美游館  
大阪狭山市西山台  
6・1・16  
TEL.072・367・5650

# 藤本義一さんへ 五十年目の手紙

文／保田善生（元宝塚映画プロデューサー）



別荘「山の家」にて、「義一ファミリー」の集い

厳しい寒さが続いておりますが、  
そちら白玉楼の住み心地はいかがな  
ものでございますか、相変わらず原  
稿に向かってペンを走らせておられ  
る毎日なのですか、時にはこよなく  
愛したシーバスのダブルの水割り  
をてっちりで楽しみながら、駄洒落  
を交えながら面白おかしく西鶴さん  
や織田作之助さん等とお話してい  
らっしゃるのではないのでしょうか、  
そうそう、競馬はどうなっているの  
でしょうか…なんて事をこちらで勝手  
に想像しています。

しかしこの冬は特に私にとっては  
心身ともに冷え込んだ辛い年末年始  
になりそうです。だって年末年始の  
ご挨拶に伺ってもお逢いできないの  
ですから…。当に私の心の支柱が折  
れたような心境です。

お付き合いしていただいて五十一年  
余り経過いたしました、年賀状  
以外お手紙を差し上げるのは初めて  
の事になるうかと思えます。これが  
最初で最後のお手紙になるかと思  
いますので、お世話になった嬉しい思  
いの出の数々を思いつくまま拙い文章  
で綴ることにいたします。

昭和三十六年春、私は一応、演出  
希望で宝塚映画製作所の門をくぐり  
ました。三か月程研修という形で現  
場から仕上げまでいろいろな仕事を  
経験させてもらった後、結局TV・  
PR映画関係の仕事をするように  
なったのですが、その時、藤本さん  
が所属している企画部と部屋が同じ  
だったのが、私の五十一年間を決め  
る運命のスタートラインであったの  
です。

その頃の先生（私は呼び方が、「義  
一さん」「藤本さん」、直木賞受賞以  
来「先生」と変わりました）は、GI  
カットに革ジャン、役者とはまた  
ちよっと雰囲気の違いダンディな  
かつこよさがありましたね。

お顔を合わせる度、私は心の中で  
「一度この人とお話ししてみたい」と  
思ったものです。

チャンスは秋ごろ意外に簡単に  
やって来たのです。

私をご存知のように飲酒大好き人  
間です。企画室にいた島崎君（撮影所  
一年先輩）も同様に呑み仲間でした  
が、秋のある夕方、先生とご一緒に  
三人で阪急電車に乗って梅田まで



三重県・渡鹿野(わたかの)島の温泉旅館にて、先生とデュエット(86年7月)



筆者の結婚式では司会を務めていただいた(1967年5月)

行ったのが、お近付きになった初めての機会だったので。島崎君が帰った後、先生が呑みに誘ってくれました。私は二つ返事でお供致しました。

曾根崎界限で下地をつくった後、道頓堀の(下・ジュアン)というパパバーへ連れていただきましたが、未だ貧乏学生気分の私にとっては龍宮城へ来たような気持ちでした。『トリス』がいきなり『角』に位上がり、宝塚歌劇さながらのバーテンダー、カウンター嬢何もかもが初体験。夜明けまで酒の美学をご教授していただきました。

それからというものは呑めば朝、そのままお店でカレーを食べたりしましたね。

その頃からよく諏訪ノ森のお宅へ泊めていただきましたが、考えてみると長女の有子ちゃんが未だ産まれたばかりではなかったのでしょうか。統紀子夫人には随分とお世話になりました。ご迷惑お掛けしたと思います。

先生は、ユーモアを愛し、また、いたずらが好きだったですね。あの夏の深夜、呑んだ挙句に宝塚映画

の飲み仲間だった「林の部屋(実は私が元居た部屋)を襲おう」という事になり、大阪からわざわざ車を飛ばして宝塚の彼のアパートまで行き、勝手知ったるドアを開け寝ている林君の枕を蹴飛ばし、何が起こったのやら分からずうろたえる彼に先生が「今頃なにを寝てんのや、時間が惜しい起きろーさあ呑もう。」

林君があわてて眼鏡をかけ直し、傍にあった『トリス』を差し出すのと「なんや『トリス』か、もうちょっとええの呑め」と

と言いながら飲み明かした事がありましたね。その朝二日酔いにはカキ氷が良いと言うので、駅前でカキ氷を食べました。

「カキ氷のスプーンはアルマイトやないといかんのや」と能書きを言いながら食べておられました。後でえらい下痢をしたと聞きました。

そう言えば先生は海外でも水によくあたっておっしゃっていましたね。住友金属PR映画、先生命題「火と水と人」のシナリオハンティングに泊りがけで出掛けた頃は、ドラマの脚本二本を持って行かれてましたね。

計三刀流を使いながら遊びの哲学はちゃんと学ばせていただきました。

驚いたのは、西宮のお宅から旧読売テレビまでタクシーに同乗させてもらった事がありました。が、車中約四十五分間に新聞連載小説を一本（原稿用紙三枚半）を書き上げたことです。それも私が話しかけては執筆の邪魔になろうと静かに座っていると、いろいろ話しかけて来るのですからこれには聖徳太子並かと敬服いたしました。

先生に「作品を書き分けていると物語がごっちゃになりませんか？」とお聞きしましたら、タイトルを見たら思い出すとおっしゃったのにはさすが売れっ子作家だなあと考えたものでした。

昭和五十八年、宝塚映画整理時には先生にいろいろご相談に乗っていただき、結局私が独立する事になったのですが、その際先生の事務所を借らせていただき、おまけに社名まで考えて下さいましたね。おかげで今日がある訳で大恩人です。なんて書くと「アホー」と言われそうです。

旅の番組制作でご協力願った際、

ユーモアといわずらの真髓を見せていただきました。忘れられないのは、年末四日間を割いてもらって石垣・竹富島に旅した時の夜のバーでの事です。私はよく出鱈目の中国語を披露していたのがきっかけて、この店でも中国人になりきって日本語を喋るなど言われ、先生が通訳をされる訳ですが、

「おいヤツサン。中国にはな、ロールのトイレットペーパーがないんや。だからなあ、お前、トイレへ入って尻に紙を付けたまま出て来い」

言われるまま実行に移しましたが紙が切れて駄目でした。その旨伝えると、

「それでは中国にはこんなトイレットペーパーは無いから売ってくれと頼め」

それからの店のマスターとのやりとりは最高傑作でしたね。結局売り物ではないのでと、土産に一ロール貰って帰って大笑いしながら南国の夜明けを楽しんだのが昨日のように思い出されます。

小豆島の別荘で「闇なべ」で楽しんで後、ちょっと離れたプールまで、



大きな帆に風を受け、ヨットセーリング(86年ごろ)



先生は野球チーム「この世スネーズ」のオーナー、  
筆者は監督を務めた

先生・林君・私三人のストリーキング。統紀子夫人にえらい怒られましたね。

南紀白浜までの気動列車内、先生と私の座席に、あれは排気口か何かの柱があり、専務車掌が通りかかった際先生に気づき「あつ、先生、失礼しました。こんな座席柱が邪魔で狭くなって申し訳ありません」と言う挨拶に、間髪を入れず先生柱を指差し、

「これが無ければ走らない」とのお返事に車掌がひっくり返ってしまいましたね。お見事！ご二緒時のいたずらやユーモアは枚挙に遡がありません。

一方では名前のとおり「義」礼に

は厳しかったですね。梅田曽根崎署裏にあったショットバーはわれわれ呑み助（格好良く言う）と酒文化を愛するの溜り場でもありましたが、

「芸能の若者が私に「ヤッサンヤッサン」と呼んでいるのを耳にして、先生はやおら彼に「お前ヤッサンと呼んでいるが、ヤッサンの方がこの道の先輩と違うんか、失礼やで」と言われたのを聞いた時思わず私も襟を正しました。でもその後は場を白けさせないよういつものユーモアある話をされて、本当に心の広い優しい人なんだなあと思う感動したものでした。鉛と鞭の使い分けですかね。

「IPM」のスタジオにはよく遊びに行かせてもらいました。当時私も堺の住民でしたので、遊びに行つては先生の帰りのタクシーに便乗させていただきました。そんなある深夜、突然我家へ立ち寄ると言われ家内があわてたことがありました。

私達の結婚披露宴の司会は先生がして下さったので、家にながられて披露宴の写真をお見せしたところ、ペンを取り出し挨拶をしている顔にそれぞれ面白いコメントを次々と書き出したのはびっくりしましたが、大変すばらしい記念写真アルバムとなりました。

同好会（呑酒会）のようなもの立ち上げるのもお好きでしたね。製鉄界の仕事に携わった後は「せい（性徹会）」、プロアマ野球経験者を集めた野球チーム「この世スネーズ」（おかげで甲子園球場で試合をさせてもらい「IPM」にも出させていただきました）、表面上はきちんと喋ネクタイなどして本気で遊ぶ「たてまえの会」、十一人の友人連がそれぞれ積み立てをして、メンバーの誰かがあの世人になられた時

は積立金で残りのメンバーが大騒ぎするという「五丁目（互長命会）」いずれも非常にユニークな楽しい会でした。非常に残念ですが、会則に法り積立金を払い戻し、「五丁目会解散宴会を年末やらせていただきます。

「アホか！」の声が聞こえそうです。でも先生に何よりも感心させられるのは、「人の悪口は言わない」「我慢をしない」「人を大事にする」「肩書きでものを言わない」ことでした。私も先生に倣わなければと思います。が、なかなか実行は出来ません。

最後に私は人生の師と仰ぐお方にお遭い出来たことは、一番の幸せだったとつくづく思っております。私には白玉楼中の人となる資格はございませんが、いずれそちらに旅立った時には是非楼中へ遊びにお呼び下さい。

五十一年間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

平成二十四年師走

藤本 義一様

保田 善生